

パウロ書簡における 教会人としてのキリスト者の成熟

岩上敬人

1. はじめに

2021年度の福音主義神学会・全国研究会議のテーマは「キリスト者の成熟：教会、社会、文化」であった。このテーマについて本稿では、「教会人としてのキリスト者の成熟」の主題を新約聖書、特にパウロ書簡から取り上げる。「キリスト者の成熟」と「教会」はとても密接な関係がある。しかし、これまでの人間個人の救済論を基軸とした神学的アプローチでは、キリスト者の成熟の課題が、神の前におけるキリスト者個人の成長という問題として、限定的にとらえられる傾向にあったように思う。パウロ書簡をはじめ、新約聖書全体を俯瞰していくなら、「キリスト者の成熟」という主題は、キリスト者個人というよりも、教会共同体の文脈で頻繁に扱われており、神の前におけるキリスト者、個人としての成熟は、その土台として厳然とあるものの、中心的関心になっているとまでは言えない。むしろ教会共同体における成熟という側面が、新約聖書における中心的関心となっている。そのような意味で、教会人としてのキリスト者の成熟は、実に新約聖書的な主題であると言えるだろう。

さてパウロ書簡、またパウロ神学においてキリスト者の成熟という主題は、非常に幅広く、さまざまな語彙、比喩表現等から考察することができるが、本稿では、一つの語彙に焦点を当てていきたい。それは、ギリシア語の形容詞 τέλειος と動詞 τελειόω である。H. Hübner によると、τέλειος は古典ギリシア語

やコイネーギリシア語において、祭儀用の完全な、欠損のないいけにえの動物、十分に成長した大人について用いられた言葉であった¹。形容詞 τέλειος は新約聖書において、「完全な」(マタ 5:48)、「成熟した」(1 コリ 2:6)、「大人の」(1 コリ 14:20、ピリ 3:15)などと訳され、動詞 τελειόω は、「完了する」(ルカ 13:32、ヨハ 19:28)、「成し遂げる」(ヨハ 4:34)、「完全にする」(ピリ 3:12)、「完全な者にする」(ヘブ 2:10、5:9)など、文脈に応じて様々な日本語に翻訳されている²。もちろん、τέλειος と τελειόω が用いられるすべての章節において、キリスト者の成熟の主題があるわけではない。本稿では「成熟、完全」と訳されるような鍵となる章節の中から、この主題が表出していると考えられる箇所をいくつか取り上げたい。また、新約聖書全体ではなく、特にパウロ書簡に焦点を当て、その中からさらに鍵となる聖書箇所を取り上げて、成熟の概念について掘り下げていきたい³。ただし、詳細にわたる釈義を行うというよりは、文脈の中で、特に手紙全体の文脈での大きな意味を考えていくこととする。本稿の目的は、教会人としてのキリスト者の成熟の概念についてパウロ書簡から、概観的な輪郭を描くことであり、細部にわたる研究ではない。なお本稿では、断りのない限り、聖書本文の引用は『聖書・新改訳 2017』を使用している。

II. パウロ書簡における τέλειος と τελειόω の用法の概観

W. W. Klein は、パウロ書簡における「成熟・完全」の概念について以下の四つの領域があると区分している⁴。一つは神学的な意味に重心がない、「目的を達成する、到達する」意味での成熟・完全である(1 コリ 14:20、2 テモ 4:7)。第二に「キリストにある」存在としての霊的完全である。キリスト者はキリストにあってすでに完全な者である(1 コリ 2:6)。イエスによる救いを通してキリスト者は完全という立場に置かれている。第三に、現世における相対的完全である(ロマ 12:2、コロ 4:12、エペ 2:15)。最後に、来たるべき時代の究極的完全である。パウロは現世におけるキリスト者また教会による成熟、完全だけでなく、完成の時、目標としての成熟、完全について語っている(1 コリ 13:10、ピリ 3:12~14)。このような四つの用法は互いに関連し合っていて、きれいに分類できるわけではない。Klein の第一の区分についても議論の余地は十分にある。神学的意味に重心のない(non-theological)意味が、果たしてパウロ書簡で用いられる τέλειος と τελειόω の用法の説明に合っているかどうかとも再考の余地がある。ただし、成熟・完全の概念を俯瞰する一助になるだろう。

以上、述べたような四つの領域に区別される言葉の用法を一つの物差しとして用いながら、成熟・完全という概念の解釈に入っていきたい。次項で取り上げるのはピリピ人への手紙、ローマ人への手紙、そしてエペソ人への手紙のテキストである。これらの三つの手紙を通して、パウロの完全・成熟の概念について、またそこから導き出される神学について、特記すべき共通点、概念を見ることができると考えている。もちろんこれ以外にもコリント人への手紙第一やコロサイ人への手紙も重要であることは言うまでもない。本稿では字数の制限があること、三つの手紙がパウロの完全・成熟の概念を包括的に網羅していることから、これらのテキストに焦点を当てることとする。

⁴ Klein は以下の四つの項目を挙げている。(1) Maturity, having attained the goal; (2) Spiritual perfection as existence “in Christ”; (3) Relative perfection in this life; (4) Ultimate perfection in the age to come. W. W. Klein, “Perfect, Mature,” *Dictionary of Paul and His Letters* (Downers Grove: InterVarsity Press, 1993), 699–701.

¹ H. Hübner, “τέλειος,” *Exegetical Dictionary of the New Testament* (Grand Rapids: Eerdmans, 1993), 3:342–344.

² これらの訳語は新改訳 2017 で使われているものである。なお、協会共同訳でも τέλειος の訳語はほとんど同じである。動詞 τελειόω の訳語は「成し遂げる」(ヨハ 4:23, 19:28)、「完全な者となる」(ピリ 3:12)など多少違いはあるが意味としては同じである。

³ パウロ書簡の中で形容詞 τέλειος が用いられているのは、ロマ 12:2、1 コリ 2:6、13:10、14:20、エペ 4:13、ピリ 3:15、コロ 1:28、4:12。また動詞 τελειόω が用いられているのはピリ 3:12 である。もちろん、パウロ書簡以外においても、キリスト者の成熟に関する重要な新約聖書文書がある。たとえば、マタイの福音書 5 章 48 節やヘブル人への手紙などである。新約聖書全体からキリスト者の成熟を考えるならば、こういった聖書箇所の釈義研究も避けて通ることはできない。しかし、限られたスペースではそこまで釈義の対象を広げることは困難である。

III. 教会人としてのキリスト者の成熟—パウロ書簡の解釈—

A. ピリピ人への手紙 3 章 12~15 節

パウロ書簡におけるキリスト者の成熟について釈義に入っていくが、まず初めに取り上げたい箇所はピリピ人への手紙 3 章である。もちろん、ピリピ書全体の文脈も含めた解釈と併せて、神学的な考察を行いたい。ピリピ書はパウロの成熟、完全の概念を理解するために、重要な手紙の一つであると言えるだろう。

ピリピ 3:12~5

12 私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕らえようとして追求しているのです。そして、それを得るようと、キリスト・イエスが私を捕らえてくださったのです。13 兄弟たち。私は、自分がすでに捕らえたなどと考えてはいません。ただ一つのこと、すなわち、うしろのものを忘れ、前のものに向かって身を伸ばし、14 キリスト・イエスにあつて神が上に召してくださるという、その賞をいただくために、目標を目指して走っているのです。15 ですから、大人である人はみな、このように考えましょう。もしも、あなたがたが何か違う考え方をしているなら、そのことも神があなたがたに明らかにしてください⁵。

この箇所での τέλειος と τελειόω の用法は興味深い。まず、パウロはピリピ 3 章 12 節において τελειόω の受動態・直接法・完了形を用いて「私はすでに完成されている (ἡ ἡδὴ τετελείωμαι) のではない」と述べている。その完成の状態とは「死者の中からの復活に達すること (καταντήσω εἰς τὴν ἐξανάστασιν τὴν ἐκ νεκρῶν)」(3:11) である。パウロは動詞 καταντάω 未来形を用いており、明ら

かに将来の出来事を示している。さらに、将来、キリスト者にもたらされる復活は、続く 14 節にある「目標 (σκοπὸν)」、「賞 (βραβεῖον)」、「キリスト・イエスにあつて神が上に召してくださること (ἄνω κλήσεως τοῦ θεοῦ ἐν Χριστῷ Ἰησοῦ)」という三つの表現に言い換えられている。これらの用語は、パウロが目指す「完成」を多様な表現を使って表しているのである。目標と賞は、特に競技場のイメージである⁶。パウロは I コリント 9:24~27 においても競技場のイメージを用いており、好んでキリストにあつて生きること、死ぬこと、人生の歩みを比喩的に表現する。パウロは、その完成にはまだ至っていないと述べた上で、完成である死者の復活を目標とし、そこを目指して追求し、生きていることを告白している。さらにこのような考え方、生き方を模範にして、「大人である人はみな、このように考えよう (Ὅσοι οὖν τέλειοι, τοῦτο φρονῶμεν)」(3:15) と勧告するのである。パウロの生き方、考え方に倣う者をパウロは「大人、完全な者、成熟した者 (τέλειοι)」と表現している⁷。ここにパウロの「成熟・完全」の神学的理解が表されている。

パウロがピリピ 3 章のテキストで扱っているのは、Klein の区分に従うなら、究極的な完全と相対的な完全であると言えるだろう。究極的な完全とは、パウロが今はまだ完全にされていないこと、将来、死者の復活に達すること、神がキリストにあつて上に召してくださることの中に明示されている。相対的な完全は、究極的な完全を目指して現在を生きるキリスト者について、完全な・成熟した者と表現している中に示されている。とりわけここで、明確にしておくべきことは、究極的な完全、完成と現世の相対的な完全・成熟には連続性がある点である。つまり現世の完全・成熟は現世だけに制限されておらず、将来において、現在とまったく関係もつながりもない異質の完全が復活によってもたらされるので

⁶ Ben Witherington III, *Friendship and Finances in Philippi: The Letters of Paul to the Philippians* (Valley Forge: Trinity Press, 1994), 95.

⁷ 注解者の中にはピリピ 3 章における τέλειοι を皮肉として解釈し、パウロが完全ではない者をあえて完全な者と呼んでいると理解する。このような解釈について筆者は同意することはできない。Peter T. O'Brien も同じ立場をとっている。Peter T. O'Brien, *The Epistle to the Philippians*, New International Greek Testament Commentary (Grand Rapids: Eerdmans, 1991), 435-436.

⁵ 下線は筆者による。

はないのである。パウロが現在、生きている中での完全と成熟は、将来もたらされる究極的完成の写しのようなものである。そして、キリスト者が目指すべき究極的な目標、完成に向かって生きる者は「成熟した者、完全な者」なのである。またパウロ自身がキリストを目指し、キリストの死、復活と同じ状態、上、目標、賞を目指して生きていることから、パウロは自分自身を「完全な・成熟した者たち (τέλειοι)」の一人であると理解していたことは明らかである。

パウロは「完全な、成熟した者」が現世においてどのように生きるのかも明確にしている。まず、キリスト者の現在の状態は、3章9節において動詞現在分詞形 ἔχων の目的語によって示される τὴν διὰ πίστεως Χριστοῦ, τὴν ἐκ θεοῦ δικαιοσύνην ἐπὶ τῇ πίστει (キリストの真実／キリストへの信仰を通して、信仰に基づいて、神からもたらされる義) である⁸。神からもたらされた義の中を生

⁸ 本稿では、πίστεως Χριστοῦ (ピリ 3:9) が「キリストの真実」であるか、「キリストへの信仰」であるかという解釈上の争点については触れず、訳語の二つの可能性を記すのみに止めておく。また τὴν ἐκ θεοῦ δικαιοσύνη もパウロ神学の中でローマ、ガラテヤ教会への手紙と同様に「義認」の主題を扱う重要な箇所の一つである。本論では義認の主題については扱うことはできない。ただし、完全・成熟の概念が信仰による神の義、またはキリストの真実による神の義と密接に結びついていることは、確かである。「律法による自分の義 (ἐμὴν δικαιοσύνην τὴν ἐκ νόμου)」はパウロがパリサイ人として律法を守ってきたこと、非難されるところのない者 (ピリ 3:6) だったことについて言及している。また自らがユダヤ人であり、割礼を受けたという、生まれながら契約の民に属している (アブラハムの子どもとしての) 立場を指していると言えるだろう。これはパウロがガラテヤ人への手紙でも否定している義である。ガラ 3:10 で「律法の行いによる人々がみなものろいのもとにある」とパウロは宣言している。かつて非難されるところがないほどに律法を守っていたと誇るパウロでさえ、律法のものろいの下にあったのである。ただし、ここでの「義」については二つの解釈の可能性がある。一つは、神の最後の審判の前に耐えうる道德的正しさ、もう一つは、神の民に所属していること、契約の民の構成員であること、アブラハムの祝福を受け継ぐ者としての立場である。キリストを信じることによる義については、一つはキリストの十字架の贖いと罪の赦しのゆえに、キリストの義が転嫁され、与えられる道德的正しさ、あるいは、キリストがアブラハムの子孫として、十字架による贖いを通して、イスラエルが果たすべき使命を果たして、ユダヤ人を神の民として回復するだけでなく、異邦人も契約の民としての立場を与えられるようになったことという解釈がされている。前者は伝統的な立場であり、後者はパウロ研究の新しい視点が強調している点である。ライトはパウロの義認とは、

きるパウロは、究極的完成を目指し、そこに至る過程を 10 節で述べている。それは、動詞アオリスト不定詞 γινῶναι の三つの目的語である。第一は γινῶναι αὐτὸν で、これはキリストを知ること指している。キリストを知るとは、さらに具体的に次の二つの目的語によって説明される。それが「キリストの復活の力を知ること」(τὴν δύναμιν τῆς ἀναστάσεως αὐτοῦ) であり、「キリストの苦難の交わりを知ること」([τὴν] κοινωνίαν [τῶν] παθημάτων αὐτοῦ) である。さらにそれはキリストの死と同じ状態になること (συμμορφιζόμενος τῷ θανάτῳ αὐτοῦ) でもある。究極的な完全である復活に至る完全・成熟の過程を、パウロは十字架の苦難として理解していた。キリストの生涯には十字架の苦難と復活は連続する出来事であり、相互補完する出来事であった。このような現世の完全・成熟と来たるべき時代の究極的完成の連続性は、ピリピ 2 章における、キリスト賛歌との比較によって、さらに明らかになる。

ピリピ人への手紙全体の文脈の中で、キリスト者の成熟・完全を考えるにあたり、究極的な完成、死者の中からの復活という終末的な視点は重要である。特にピリピ人への手紙の基幹的構造として、以下に示すとおり主イエスとパウロの比較構造がある。それは有名なキリスト賛歌 (ピリ 2:6~11) と本稿の中心箇所であるパウロの自伝的告白である。二つの箇所を比較する。

ピリピ 2:6~11

6 キリストは、神の御姿であられるのに、
神としてのあり方を捨てられないとは考えず、

一義的に契約の民の構成員としての立場であり、イエス・キリストの十字架と復活による贖いのゆえに、罪を赦され、最後の審判 (終末) において正しい者であると審判者である神から好意的立場を前倒して受けることと論じている (ライトは、パウロの手紙にキリストの義の転嫁の概念があるかについて、消極的あるいは否定的でもある)。こういった議論については、以下の文献を参照。O'Brien, *The Epistle to the Philippians*, 392-400; N. T. Wright, *Justification: God's Plan and Paul's Vision* (London: SPCK, 2009), 119-130; N. T. ライト『使徒パウロは何を語ったのか』(岩上敬人訳、いのちのことば社、2017 年) 237-242 頁、ジョン・パイパー『義認の未来—N. T. ライトに対する応答』(中台孝雄訳、いのちのことば社、2020 年) 173-246 頁、J. D. G. ダン『使徒パウロの神学』(浅野淳博訳、教文館、2017 年) 444-507 頁